

## 関係者ヒアリング結果概要

### 1 日時

令和6年10月30日（水）13時30分～14時48分

### 2 場所

オンライン開催

### 3 対象者

NPO法人Mother's Tree Japan 事務局長 坪野谷 知美 氏

### 4 対応者

出入国在留管理庁政策課外国人施策推進室 佐藤室長 ほか

### 5 内容

（NPO法人Mother's Tree Japanの取組について）

- NPO法人Mother's Tree Japanでは日本に暮らす外国人女性の妊娠出産・子育てのサポートを行っており、妊娠期から子どもが1歳前後になるまでの間の外国人女性を主にサポートの対象としている。
- Mother's Tree Japanは保健師、助産師、保育士、バースドゥーラ等、日本人の専門家がコアとなり、そこに13か国80名の通訳・翻訳スタッフがボランティアメンバーとして参加している。なお、ボランティアには多少の謝金をお支払いしている。
- 外国人女性の文化、風習及び宗教に寄り添って活動することが、当法人のメインテーマの一つである。
- 産前産後は風習や民俗の影響が一番色濃く出る。例えば保健師がヨウ素が足りていないため海藻を食べよう栄養指導しても、食文化の違いから受け入れられないというようなことがあり、結果として、「文化が違う人が言う話だから」と外国人ママが心を閉ざしてしまうことも多い。
- そのため、外国人ママをサポートする際には、同じ文化圏から来た人や母国語が話せる人など、先輩ママにできるだけ間に入ってもらい、自国の文化、風習と自分が日本で体験してきたことのギャップについて橋渡ししてもらっている。
- 取組を通じて見えてきた外国人の母親の持つ困りごとをリストアップしており、市区町村等の講演会や勉強会等でシェアしている。
- 当法人が提供しているサービスについて詳しく説明すると、まず第一にLINEで母国語で助産師に直接相談ができるサービスがある。
- 相談内容の例としては、「医師の説明を受けたが意味が分からないので改めてその意味を聞きたい」、「赤ちゃんを診察した医師からしばらく様子を見ようと言われたが様子を見るところはどういうことか」等がある。日本人であれば、ずっと受け入れられるようなことでも、外国人の場合はつまづいてしまうことがある。ち

よっとしたつまずきが大きな問題になる前に、母国語で相談できるということで、当法人のサービスを活用していただいている。

- まずは、LINEの相談から入る人が多く、月に60件程度は相談対応をしている。
- 次に、寄り添い、付添いと同行支援というサービスがある。病院や行政等からの要請で付き添うこともあるが、個人から「本当に困っているので助けてほしい」というヘルプが来たときの同行支援には特に力を入れている。
- 付添いの支援は月に15件弱は行っている。自動翻訳ツールは話し手がツールに適した話し方をできない場合、適切に翻訳されないことがあるので、そのような場合にも我々がオンラインも含めて相談に対応している。これらを含めると3年間で3,000件程度の相談や付添いに同行してきたことになる。
- オンライン相談会もやっており、テーマを決めて毎月6言語で助産師に何でも聞ける会等を開催している。
- また、イベント、勉強会、サロンも実施していて、特に勉強会については現在力を入れているところである。
- 医師不足と言われる中、医師にとって外国人妊婦は負担感が大きく、個人のクリニックだと自費で医療通訳をつけない限り受け入れられなかったり、公立の病院でも特定の宗教の方はお断りという病院も増えていたり、支援する側として苦心しているところである。
- 我々で制度を変えることは困難なので、まずは外国人妊婦の方に最低限の日本語を学んでもらうことが大切であると考えている。
- 「陣痛」「破水」「さすってほしい」等妊娠出産に係る日本語は、通常教えてくれる場所がない。そのため、我々の勉強会を通じて覚えてもらっており、オンラインでも展開しているところである。
- 母親サロンという取組も毎月様々な場所で行っている。母親サロンでは母親たちがつまずいているところをヒアリングしているが、外国人の方の場合、我々が思いがけないところでつまずくのだと実感している。
- 例えば「なぜ日本では自然分娩が標準なのか」「なぜ日本の医師はサプリを出してくれないのか」等、我々が当然と思って他国との違いと気づかないような部分につまずきの要素があるため、これらの違いを踏まえて説明をするようにしている。
- 妊娠出産に係る指さしボードも作成し、現在病院でも全国的に使用していただいている。
- 通訳の実績があつたり、日本語能力試験N1を持っていたりする人でも、話を聞くと、お産のときは感性的な部分が圧倒的に優位になってしまうため、日本語が一言も分からなくなってしまうという。
- そのような時でも看護師が指さしで今の状況を聞けば意思の疎通ができるよう

なボードを作成したほか、町中で倒れてしまったときに「助けてください。妊娠しています。〇〇国／地域の出身者です。日本語のレベルはこれくらいです。」ということを表せるカードの開発等もしている。

- 自宅にパソコンやプリンターを持っていない外国人女性が多いというのも重要な点である。指さしボード等のツールを作ったとしても、プリントアウトできないと活用してもらえないので、必要な人に無料で印刷物を送る取組も行っている。
- 出産は行政等との連携が大切である。我々の拠点である豊島区を例に挙げると、豊島区子育て支援課や子ども家庭支援センター、保健所、地域の団体及び任意団体等、様々な機関と密に連携して活動している。

(外国人の妊産婦、母親への支援及び課題等について)

- 文化の違いはあっても、相談のうちの7割ぐらいは日本の母親たちも抱える悩みである。
- 一方、外国の方特有の相談ももちろんあり、母文化との違い、特に母国の母親が言うことと日本の助産師が言うことの相違に戸惑う方が多い。
- 例えば、日本は小さく産んで大きく育てるという考えのもと、妊娠中の体重増加は10キロ程度までに抑えて自然分娩を行うが、多くの国では帝王切開を権利として選べるため、母国の母親から「妊娠中はたくさん食べて、胎児が大きくなったら帝王切開すればいい」と毎日のように電話をされるといったケースがある。
- 妊婦健診も14回あるのは有り難いが、毎月有給休暇を取得して検診を受けることになるため、検診回数の少ない母国と比較して困惑してしまうという話もある。
- また、妊娠してから産むまでの流れが理解できないという問題点もあり、近くのクリニックで診察を受けてから大きな病院のお世話になるという制度なども、母国の制度との違いから理解できず、外国人の方にとってつまずきやすいポイントとなっている。
- 子育て応援ギフトについても、「何のためにアンケートをするのか分からない」、「ギフトをもらったが使い方が全部日本語で書かれているから理解できない」という相談を受けることもある。
- これらの問題について日本語の資料をそのまま多言語化すれば解決するかというところではない。ある事柄について、その人の母文化で概念として存在しないため、翻訳を読んでも、単語としては分かるが意味は分からないという相談を受けることも多い。
- 我々がサポートしている人の大半は就労や留学の在留資格を持っているが、昨年頃からアフリカから来た難民申請中の方のサポートが増えており、路上で寝泊まりしている妊婦の方についての相談を受けたこともある。このようなケースでは我々の専門外の部分も含まれるため、サポートのために様々な団体と連携して

活動するようにしている。

- 国籍ごとの困りごとの違いもある。例えば、バングラデシュ、パキスタン、ミャンマーやネパール等、近年になって在留外国人が急増した国の方々は、中国やベトナム等の以前から日本に多くの方が住んでいた方々とは違い、これまでの蓄積がないことから、得られる情報量が少なく、支援のためのリソースにつながる力も弱い傾向にある。
- 一方、中国やベトナム等、既にコミュニティがある国では、別の課題もある。上の世代が培ってきたコミュニティに若い子たちが入りたがらないという課題のほかに、コミュニティ内で不正確な情報が出回ってしまい、本当は病院に行くべき状態でも行く必要はないという判断を自分たちですってしまうこともある。
- 国別で見ると、例えばネパールの方々への支援について苦戦している部分がある。当法人に相談をしにきてくれるネパール人の方もいるのだが、自分たちの問題をシェアすることが恥ずかしいという文化のため、家のことを周りの人に相談する風習があまりないそうである。
- また、ネパールという国は地域ごとに特色があり、名前等によって出身地等がすぐに分かってしまうため、ネパール人同士だからと我々が紹介しても、文化も民俗もカーストも異なる人だからとコミュニティができにくい傾向にある。
- 情報の発信という点では、SNSの力は絶大であり、我々がFacebookで発信した情報が、ネパールやミャンマーのママコミュニティでシェアされると直ちに拡散される。そのため、既存のコミュニティに加え、SNSのコミュニティにどのようにアプローチしていくか、常に心を砕いている。
- 外国人の方から相談を受けていると、日本の妊娠、出産にかかる費用についての基礎情報がないまま妊娠する方がほとんどであり、留学生等、普段から家計が苦しい中で妊娠するという事例も多い。
- 在留外国人に対する基礎調査では、妊娠、出産にかかる費用が高いと答えた人が多いようだが、実際に日本における出産費用が高いどうかの問題ではなく、事前に必要な費用を知らなかったために困っている方が多いという問題であると感じている。
- 派遣社員等では、妊娠した段階で契約を切られるというケースも非常に多い。そのような場合、F R E S C等様々なところに相談できるということも案内しているのだが、何か問題を起こすと入管に目をつけられるのではないかと行って相談に行かない方も多く、サポートに苦慮している。
- 産休や育休について契約書に書いてあっても、本人が聞かなかつたからとあえて教えない会社も多く、外国人の方が産休、育休を取るハードルは大変高い。
- 産休制度及び育休制度そのものや、届出等が外国人の方にとって難しく、職場復帰のタイミングなども含めてきめ細かいサポートがないと制度の活用は難しい

であろう。

- 日本の人は親切なので、外国の方に日本のシステムを一生懸命説明するのだが、説明する前に「あなたの国はどうか、何に困っているの」と聞いておけば容易に解決することも多い。
- 結局のところ、外国人支援のシステム化が難しい理由としては、外国人のつまずきの原因がどこにあるのかを行政や病院も分からないし、外国人本人も分かっていないという点にあるのだろう。
- 効果的に外国人をサポートするためには、かかる齟齬がどこにあるのかを素早く見つけることが大切だと思っており、齟齬を見つけだし、架け橋のように伝えることが我々の役割だと思っている。
- 外国人の死産率は2.99%と日本人と比較して高いが、これにはいくつか要因があると思っている。
- 1つには、外国人の方の場合、出血や痛みがあった場合などでも、病院に電話をしたり医師に説明したりすることに気後れして、診察を受けるのが数日遅れてしまう傾向にあることが挙げられる。
- 2つ目は、気候の違いから来る、文化、風習の違いの問題である。暖かい国出身の方などは、「冷えに気をつけて」と言われても「冷え」が何か分からず、ショールを羽織る等の発想がない。日本の四季や風土に合う暮らし方を知らないというのも原因だと考えている。
- 3つ目は医師とのコミュニケーションの困難さである。通訳機器や医療通訳を活用する医師も増えてきたが、通訳の人を含め、初対面の相手に婦人系の機微な話をするに抵抗がある方も多く、症状について、黙ってしまったり「大丈夫です」と言ってしまうことも多い。
- 外国人の産前サポートに取り組んでいる団体は少なく、サポーターの数が不足しているのも課題である。
- 自分自身を含め、様々な機関や団体が外国人の方に知ってほしい情報を発信しているが、本当に彼らが知りたい情報を十分に提供できていないという点も課題である。
- 外国人の方の課題として、家族計画という概念があまりなく、経済状況等を考えずに妊娠、出産を迎えることも多い。
- フィンランドでは入国時の暮らしのガイダンスで家族計画や妊娠、出産、避妊について詳しく教えているそうである。
- 外国人の方は子どもが増えて困窮したので公的な補助を受けるというのも難しく、正直に言って世間の風当たりが強いトピックでもある。そのため、妊娠、出産、避妊に係るガイダンスは日本でも必要であると感じている。

(生活オリエンテーション動画及び情報の発信について)

- 生活オリエンテーション動画について、周りの外国人で知っているという人は少なかったが、自分たちのような援助者の中ではよく知られており、上手に作ってあると感じている。このため、伝え方の参考としたり、自分たちの端末を使って動画を見てもらったりというように活用している。
- あえて改善点を挙げるとすれば、制度等、日本人なら知っているであろう前提の下で作られている部分もあるので、外国人にとって当然ではない前提の部分をもう少し膨らませれば、より外国人の方も理解しやすくなるであろう。
- より多くの方に知ってもらうために有効なのはやはりFacebookである。外国人の方に向けた有料広告は特に効果的で、我々も時々利用している。

(外国人との共生社会の実現に向けたロードマップについて)

- 外国人との共生社会の実現に向けたロードマップはよくできており、かわいらしいイラスト付きで施策を紹介しているHarmoniUP!も非常によいと思っている。
- これまで自分たちがやってきた活動が、外国人との共生社会の実現に向けたロードマップに沿っていたことで、活動の方向性に自信を持つことができた。
- 提案という点では、少しロードマップから離れるかもしれないが、産前産後5万円ずつがギフトカード等で送られる、出産応援ギフト及び子育て応援ギフトについて、外国人妊産婦に特化したサービスにも使用可能とするのがよいのではないかと考えている。
- 外国人の妊産婦の方の場合、多くは付添い支援が合計3回程度必要となるところ、ギフトの中の選択肢として支援を受けられるようになれば、既存の妊産婦への支援制度の中で外国人妊産婦の方が使いたいと感じた時に必要な支援を受けられることになり、地元の支援団体の運営の助けにもなると考えている。

(孤独・孤立について)

- 孤独・孤立に係る相談はとて多く、外国人というだけで周りの皆が敬遠したり、ママ友が作りにくかったりと孤立しやすい土壌があると感じている。
- クリニック等では母親教室等を行っているが、外国人の方で母親教室等に行っている方は恐らく数%もないであろう。
- これは通訳をつければ解決する問題ではなく、日本人の当たり前を前提とした母親教室に行っても、外国人の方には理解できないという問題があり、結果として外国人の方の孤立化は進んでいく。
- 産後サポートも制度はあるが、利用できている外国の方は10%もないと認識している。
- 面接等を含めて全てが日本語であり、加えて文化の違いで食事等も異なるため、

ヘルパー制度も利用が困難である。

- 産前産後ともに孤立している外国人の方がほとんどだと思っており、孤立して助けを求める先が見つからない中で当法人にたどり着く方も大変多い。中には精神安定剤を飲みながら子育てをしている方や、本当に孤独で死んでしまおうかと思ったという方もいて、本当に深刻な問題だと痛感している。
- 当法人で毎月行っている母親教室や日本語クラス、LINE相談等を通じて母国語で相談できたり、先輩ママと知り合えたり、そうでなくても同じ外国人で孤立している者同士がいることが分かったりということが孤立に対する支援にもなっていると考えている。
- また、日本人ママでも、日本人ママだけの輪の中に入って行くよりも、外国人ママのいるところの方が気楽ということで、当法人の取組に参加する方もいる。外国人ママに対してのみではなく日本人ママの孤立への支援にもなっている。
- 昨年度、様々な国の子育てを日本人ママに紹介する「多文化共生子育てフェスティバル」を初めて開催したところ、300人弱の日本人ママの来場があった。その中で、外国の子育てを知る面白さや、子育てで悩んでいるのは自分だけではないということに気づいてもらえて、自分としてもみんなと育てていく多文化共生子育ての面白さ、大切さを実感したところである。

(その他)

- 外国人ママのサポートは外国人ママのためだけでなく、日本人ママのためにもなると常に思っている。
- 現在の日本人ママは理想の子育て像が暗黙のうちにあり、常によいママでなくてはならないと子育ての正解を探し続けてしまい、悩み、苦しむ傾向にある。
- 外国人ママは3世代同居で育った方も多いため、様々な外国の知恵を持っている。そのような知恵を知ることで、一つの子育ての答えに縛られる必要はないのだと日本人のママに気づいてもらうことができる。
- また、妊娠、出産に係る書類の多さや医療用語の難しさは、実は日本人ママの多くも苦慮している部分である。外国人ママの目を通して見たときに、日本のシステムを少し改善すればもっと子育てが良くなるという視点を得ることができるものは多く、少子化対策にもつながっていくと思う。
- 中には、もしかしたら外国人の赤ちゃんが増えることに抵抗がある方もいるのかもしれないが、いろいろな子育てを知ることで、日本人に生じるメリットも大きいと思う。子育てダイバーシティとも呼ぶべきもので、現在衰退してしまった「子育て」がもう一度大きく成長してほしいと願っている。
- 多文化共生は難しいものだと思いがちであるが、赤ちゃんを中心として考えると、人はまとまることができると思う。そのことを多くの人に伝えたいと思って

いる。

以上